



愛知の新名物!?

和歌山県警察本部科学捜査研究所の上田さんからリレーを引き継ぎました愛知県警科捜研の奥山と申します。上田さんとは、各都道府県の科捜研職員が、警察庁科学警察研究所に集まって研修を受ける際に一緒にさせていただいたり、和歌山県内で学会があった際には、一席設けていただいたり、いろいろお世話になっております。

みなさんは、「愛知」とか「名古屋」と聞いてどのような名物を思い浮かべますか。金シャチの名古屋城、手羽先、味噌煮込みうどんやひつまぶし等のなごやめし、飲み物一杯の料分でパンやサラダ、店によってはきしめんまでも付いてくる喫茶店のモーニングサービス等、全国的に有名なもの以外に、実はあまり知られていませんが、「山車まつり」も盛んです。そこで、今回は、愛知の隠れた名物「山車まつり」を紹介したいと思います。

先日、新聞記事(中日新聞2015年1月4日版)に『「山車のアイチ」発信』という記事が出ていました。文化庁がユネスコの無形文化遺産の登録候補として国内の山車まつりなど32件を「山・鉦・屋台行事」として提案することを決めているということなのですが、この内、愛知県内には5件が集中していることから、愛知県が観光資源にと本年度から山車まつりの活性化事業を始めるという内容です。また、県内にはこれら5件を含めて210以上の山車まつりが伝わっており、全国最多クラスだということです。それら提案された5件の山車まつりは、すべて名古屋周辺各市町村に伝わっているものですが、私が住んでいる名古屋市内にもいくつか山車まつりがあり、よく見に行くおまつりに名古屋市西部の戸田地区に伝わっている「戸田まつり」という行事があります。

この行事は、生類憐みの令などを行った徳川5代将軍綱吉の時代、赤穂浪士の討ち入り、いわゆる「忠臣蔵」の事件が起こった1702年に始まる伝統のあるおまつりで、戸田地区内の一之割から五之割までの各割がそれぞれ保有する山車を曳き出し、からくり人形とお囃子、道踊りを奉納するというもので、名古屋市の指定無形民俗文化財に指定されています。それらの山車は、二層の唐破風屋根を四本柱で支える、いわゆる名古屋型と呼ばれる形態で、前棚に采振人形と上山にはからくり人形を乗せていますが、このからくり人形がとても圧巻です。一之割のからくり人形は、蓮台の上で唐子(人形のこと)が片手で逆立ちをする蓮台倒立で、この蓮台が360度回転する構造は全国でも数少なく貴重なものだそうです。二之割は、親唐子の右肩に子唐子が乗り、逆立ちをしながらか鈴を振る越後獅子のからくり。三之割は、白紙に「秋空」などの文字を筆で書く文字書き唐子で、時々書き順をまちがえそうになって筆が止まり、笑いを誘ったりします。四之割は、親唐子に肩車された子唐子が、紐をつかんで宙吊りになる唐子遊びですが、このからくり人形は、木製時計脱進装置が原理となっていて、江戸時代の人形師が、現代に通用するこの技術をすでに持っていたことを示す貴重なもので、名古屋市博物館の常設展でも展示されています。五之割は、現代の空中ブランコの如く、綾と呼ばれる宙にぶら下がった棒を繰り返し飛んでいく綾わたりです。これらの技術は、その後の精密機械や工作技術などの「愛知のものづくり」産業の基



礎になったともいわれています。この「戸田まつり」は、毎年10月の第1土、日曜日に行われますが、写真は、4年に一度、それぞれの神社から5両の山車を曳き出し、町内を練ったあと小学校の校庭に揃う「大祭」が行われますが、その時の様子です。次は平成30年がその年にあたりますので、機会があれば訪れてみてはいかがでしょうか。

さて、この「戸田まつり」に限らず、地域に伝わる郷土芸能を継承していくには、様々な課題や苦労があるようです。例えば地方のおまつりの場合、過疎化により継承者が不足したり、山車やからくりを維持、修復するための費用等の問題があったりと、おまつりを持続させても続けることができない状況もあるといえます。ただ、ある保存会の方の話として、「たいへんだけれど、この地域に住み、このような伝統の継承に携われることは本当に幸せです。」といったことを聞いたことがあります。この言葉を聞いたとき、この状況って、なんとなく我々の職場の研究環境と共通する部分があるなと思いました。つまり、それぞれの職場でお家の事情というものがあると思いますが、私が勤務している県警科学捜査研究所では、「研究業務と各種事件解決のための鑑定業務は両輪である」といわれながら、やはり時間勝負でもある鑑定が最優先となるため研究は後回しになることが多く、また、いわゆる研究費といえる予算はありません。しかしながら、他の一般的な県の職場と異なる最大の利点は、職場の転勤、異動がなく、研究環境が定年近くまで変わらないということです。ちょっと(かなり?)強引なこじつけかもしれませんが、いろいろな制約の中でも自分の研究テーマを維持(継承)できる環境にいることは幸運なことであり、この利点を生かしながら、今後も活動していきたいと思えます。

なお、今回のリレーエッセイを作成するにあたり、「戸田まつり保存会」の方に情報を提供していただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

今回は、中部大学応用生物学部応用生物化学科の石田康行先生にバトンを渡したいと思えます。先生とは10数年前、先生が学生の時からお付き合いさせていただいていますが、今でもその当時から全く変わらず、若々しくしていらっしやるのは本当に羨ましい限りです。今回は、ご多忙中にもかかわらずご快諾いただきました。誠にありがとうございました。

(愛知県警察本部刑事部科学捜査研究所 奥山修司)